

## 研究ノート

## 中四国拠点病院に勤務する看護師対象のエイズ研修会の評価と今後の課題

河部 康子<sup>1),2)</sup>, 大江 昌恵<sup>1),2)</sup>, 喜花 伸子<sup>1),2)</sup>, 高田 昇<sup>1)</sup>, 山口 扶弥<sup>3)</sup>,  
藤井 宝恵<sup>4)</sup>, 尾形 明子<sup>5)</sup>, 藤井 輝久<sup>6)</sup>, 木村 昭郎<sup>7)</sup>

<sup>1)</sup> 広島大学病院エイズ医療対策室

<sup>2)</sup> エイズ予防財団 リサーチレジデント

<sup>3)</sup> 日本赤十字広島看護大学

<sup>4)</sup> 広島大学大学院保健学研究科

<sup>5)</sup> 広島大学大学院教育学研究科

<sup>6)</sup> 広島大学病院輸血部

<sup>7)</sup> 広島大学病院血液内科

**目的:** 拠点病院の看護師を対象としたエイズ研修会の評価を行い、今後より効果的な教育・研修プログラムを構築していくための課題を明らかにする。

**対象および方法:** 2003年1月から2004年7月に開かれた4回の研修会の参加者41名を対象に、研修会参加前・終了直後・終了半年後の3時点でのアンケートを実施し、分析した。

**結果:** アンケートの回収率は研修会参加前・終了直後で100%、終了半年後では88%であった。回答者はプログラム全体及び各内容に高く評価し、参加者のニーズを満たすプログラム構成であったと考えられた。HIV/AIDS患者に接することへの不安に関しては「性的な問題に触れること」が研修会参加前よりも終了直後に増加した。この結果から、研修により知識を得たことで改めてセクシャリティーについての認識を深めたことや、HIV看護の現場では性的話題を取り上げる必要性を認識したことが考えられた。HIV/AIDS患者に接することへの不安は他の殆どの項目で終了直後には減少したものの、半年以降経過すると僅かに増加する傾向が見られた。

**結論:** 患者数が少ない地方の拠点病院ではHIV/AIDSの情報が少なく看護の経験も乏しい。それに対し当研修会は看護師に必要な情報を提供し、参加型のアプローチを行ったことでHIV看護への不安を軽減することが示唆された。今後の課題として研修後のフォローと継続的な情報交換や交流などを目的に、地域の看護ネットワークを立ち上げることが重要と考えられた。

**キーワード:** HIV/AIDS看護、看護師研修会、中四国ブロック拠点病院、アンケート分析、不安の変化

日本エイズ学会誌9: 47-53, 2007

## はじめに

効果的な抗HIV薬による治療の開発によりHIV感染者/AIDS患者（以下HIV/AIDS患者）看護は予後不良のターミナルケアからコントロール可能なセルフケア支援へと変化してきた<sup>1)</sup>。一方、日本国内のHIV感染者は増加の一途をたどり、今後は地方においても患者数の増加が懸念されている<sup>2)</sup>。1997年には、患者が安心して医療サービスを受けられることを目標にHIV拠点病院体制が構築されたが、地方の拠点病院においては大都市部に比べ患者数が少なく診療・看護経験もない病院が多いため、そこで働く看護師はHIV/AIDS患者への看護ケアに多くの不安を抱えている<sup>3)</sup>。広島大学病院では拠点病院の看護師が患者のニーズを知り、適切なケアを提供できることを目標に1998年よりエイズ看護師研修会を開催している。研修会の企画

運営は中四国ブロック拠点病院の看護師及び院内スタッフで行っている。この研修の特徴は、各参加者に細かく対応できるように受講者を10名程度とした少人数制である。また自己価値観を振り返るエクササイズ、他職種スタッフによる講義、外来見学、感染者による講演、ロールプレイなどを組み込み、より具体的にHIV/AIDS患者を理解できるようなプログラムを2日間にわたり実施している（表1）。本研究では、研修参加者のニーズや研修前後の参加者の意識や不安の変化などをアンケートにて調査し、研修会の評価と今後より効果的な教育・研修プログラムを構築していくための課題を明らかにした。

## 対象と方法

## 1. 調査対象者

広島大学病院でこれまで通算10回の研修会を実施したうち、アンケート調査を開始した第4回から第7回（平成15年1月～平成16年7月）の参加者41名を対象とした。

著者連絡先：河部康子（〒734-8551 広島市南区霞1-2-3 広島大学病院エイズ医療対策室）

2006年3月15日受付；2006年10月18日受理

表 1 研修会プログラム内容

【1日目】		【2日目】	
プログラム内容	講義者および講義内容	プログラム内容	講義者および講義内容
<ul style="list-style-type: none"> <li>・オリエンテーション</li> <li>・エクササイズ 〔参加型学習〕</li> </ul> <p>「自分の価値を位置づける」 「賛成？反対？」</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・HIV/AIDSの基礎知識</li> <li>・抗HIV薬の服薬援助</li> <li>・性的健康と セクシャリティー</li> <li>・心理的支援について</li> <li>・患者さんの話</li> </ul>	<p>体を使って自分や他人の価値観を再考する参加型プログラム</p> <p>例「私がSTDだったら、パートナーにはそのことは言わない」などの質問に対して賛成と反対に別れ、意見交換を行う。</p> <p>HIV担当医師 HIV担当薬剤師 セクシャリティー専門家 臨床心理士</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・昨日のフィードバック</li> <li>・外来見学</li> <li>・HIV専任看護師の役割</li> <li>・HIVと社会生活支援</li> <li>・HIV/AIDS患者の看護</li> <li>・体験学習</li> <li>・修了書授与</li> </ul>	<p>HIV専任看護師 ソーシャルワーカー 病棟看護師 ロールプレイ</p>

## 2. 調査方法

質問紙は記名自記式とし、研修会参加前、終了直後、終了半年後の3時点でアンケート調査を行った。研修会参加前アンケートは事前に郵送配布し、回収は研修会参加時に行った。また終了直後アンケートは、研修会終了時に配布・回収し、終了半年後アンケートは配布・回収とも郵送法で行った。

## 3. 調査内容

- 1) 研修会参加前アンケート項目：所属診療科、年齢、勤務年数、職位、HIV/AIDS患者看護の経験有無と経験年数、研修参加の動機、研修会への期待項目、HIV/AIDS患者に接することへの不安とさらに不安がある人に対してどのような不安があるかについて尋ねた。具体的には1)「HIV感染者/AIDS看護の知識が十分でない(知識が十分でない)」2)「HIV感染者/AIDS看護の経験がない(看護経験がない)」3)「自己への感染が怖い(自己への感染不安)」4)「血液や排泄物の処理」5)「HIV感染者/AIDS患者に接するのはできれば避けたい(患者に接するのを避けたい)」6)「性的な問題に触れること」の6項目である。なお、この6項目は終了直後・終了半年後と共通である。
- 2) 終了直後アンケート項目：各プログラム内容の評価(4段階)、各プログラム内容の感想、HIV/AIDS患者に接することへの不安(6項目)、今後現場で活か

せること、この研修会に望むこととした。

- 3) 終了半年後アンケート項目：主に研修終了後のHIV/AIDS患者看護の有無、研修終了後の意識の変化、HIV/AIDS患者に接することへの不安(6項目)、研修終了後から現在まで自身が行った行動、今後の研修会継続の必要性和当院に望むこととした。

## 4. 倫理面での配慮

質問紙に本調査の目的とアンケート結果のまとめや研修会の報告には個人名や施設名は公表しないこと、調査結果は研究発表などに活用することなどを明記し、承諾を得られた36名のみ(88%)分析対象とした。

## 結 果

研修会参加前、終了直後はともに41名(回収率100%)、研修会終了半年後は36名から回答が得られた(回収率88%)。

### 1. 対象者の属性

参加者41名のうち女性39名、男性2名で、平均年齢は41.0±9.7歳であった。職位はスタッフ16名(39%)、主任14名(24%)、師長5名(12%)、その他(副師長・係長)6名(15%)であった。またHIV/AIDS患者看護の経験者は18名、未経験者は23名であった。

### 2. 研修会参加前アンケート結果

#### 参加動機と期待

研修会参加の動機は「自主的に参加したいと思った」が

18名、「参加するように依頼された」が19名であった。また、研修会に期待する項目としては、HIV/AIDS患者看護経験者で、「感染者の心理問題」18人(100%)、「抗HIV薬の具体的な服薬問題」16名(89%)、「治療の最新情報」15名(83%)の順で高かった。未経験者では「HIV感染症の基礎知識」21名(91%)、「治療の最新情報」、「感染者の心理問題」で20名(87%)の順と高かった。

### 3. 終了直後アンケート結果

#### 1) 参加者の研修会の全体的な評価

参加者41名中38名が研修会全体に対し「役立った」「とても役立った」と回答しており、中でもエクササイズ、グループワーク以外の項目では「とても役立った」とする者の数が多かった。逆に「エクササイズ」で1名、「外来見学」で2名「役立たなかった」とする者があった。HIV/AIDS患者看護経験の有無に関わらず同じような傾向が見られた。

#### 2) 今後現場で活かしていきたいこと

本項目は自由記述であったが、研修会に参加し基本的な知識・チーム医療の重要性、患者を取り巻く状況の学びを得られたとの感想が多くあった。「人それぞれに価値観は違うということを実感した」「看護師として自分のことから行動していきたい」等これまでの患者に対する偏った認識に気がつき、今後はより積極的に行動していきたいという感想が多く見られた。また、少人数制の研修に対して満足度が高く、多くの参加者から継続を望む声を得られた。

### 4. 終了半年後アンケート結果

以下では研修会参加前、終了直後、終了半年後の3時点で調査に回答した人36名(経験者15名、未経験者21名)を分析対象とした。

#### 1) 研修参加後のHIV/AIDS患者看護の状況

当院の研修後に患者を担当する機会があった人が14名(39%)であった。また、所属機関に患者が来院した場合、担当する可能性は25名(69%)の人が「ある」と答えた。

#### 2) 研修を受けたことによる各個人への効果と期待

研修終了後の意識の変化については、「プライバシーについて考えて行動するようになった」の項目で36名全員が「そうである」「どちらかといえばそうである」と答えた。また、「患者さんへの対応の自信が持てた」「セクシャリティーへの抵抗感が少なくなった」で34名(94%)、「HIVに関して意欲・関心が高まっている」で28名(78%)であった。研修終了後から現在までの行動については、全体の58%の人が勉強会・報告会の開催やマニュアル作成など職場での活動に生かしていた。また、36名全員が当研修会の継続を望んでいた。その理由としては、「研修に参加することにより自分の中の偏見や知識不足に気がつ

いた。医療の中でも偏見はあり、多くの医療者がそのことに気がつく必要がある」、「拠点病院でありながら経験がなく戸惑うことも多いため学習が必要」、「すべてのプログラムが良かった。今後も看護者のレベルに合わせた研修をシリーズで行ってほしい」等学習に対して積極的な意見が多かった。

### 5. HIV/AIDS患者に接することへの不安の変化(図1・図2a・図2b)

HIV/AIDS患者に接することに不安を感じているのは、研修会参加前に32名(89%)であったが終了直後には27名(75%)、終了半年後には29名(81%)となった。

HIV/AIDS患者に接することへの不安の有無の変化をCochranのQ検定を用いて研修会参加前・終了直後・終了半年後の3時点による比較をしたところ有意差はなかった。次に、不安に関する各項目について3時点での変化を調べた。

項目別では

- 1) 「知識が十分でない」では有意な時期の差が得られた( $Q=28.44$ ,  $p<.001$ )。どの時期に変化があったかを調べるためにMcNemarの検定による多重比較を行ったところ、研修参加前(前)よりも終了直後(後)に不安が有意に減少しており、研修参加前、終了半年後(半年後)にも不安の減少が維持されていた( $p<.001$ ,  $p<.001$ )。
- 2) 「看護経験がない」では、時期による違いはなかった。
- 3) 「自己への感染不安」では時期による違いが有意であり( $Q=7.80$ ,  $p<.05$ )、研修前より後に不安が有意に減少していた( $p<.01$ )。
- 4) 「血液や排泄物の処理」では時期による違いに有意な差があり( $Q=14.80$ ,  $p<.01$ )、多重比較の結果、前より後と半年後で不安が有意に減少していた( $p<.01$ ,  $p<.05$ )。
- 5) 「患者に接するのを避けたい」では時期による違いはなかった。
- 6) 「性的な問題に触れること」では時期による違いはなかった。

次に看護経験の有無別に患者に接することについての不安の時期の変化についてCochranのQ検定を行ったところ看護経験の有無別での有意差はなかった。不安の内容に関して項目別でみると

- 1) 「知識が十分でない」については、経験者も未経験者も不安の変化に有意差が得られた(経験有( $Q=18.2$ ,  $p<.000$ ), 経験無( $Q=11.2$ ,  $p<.01$ ))。多重比較の結果、両者とも研修前より研修後と半年後の不安が有意に減少していた。

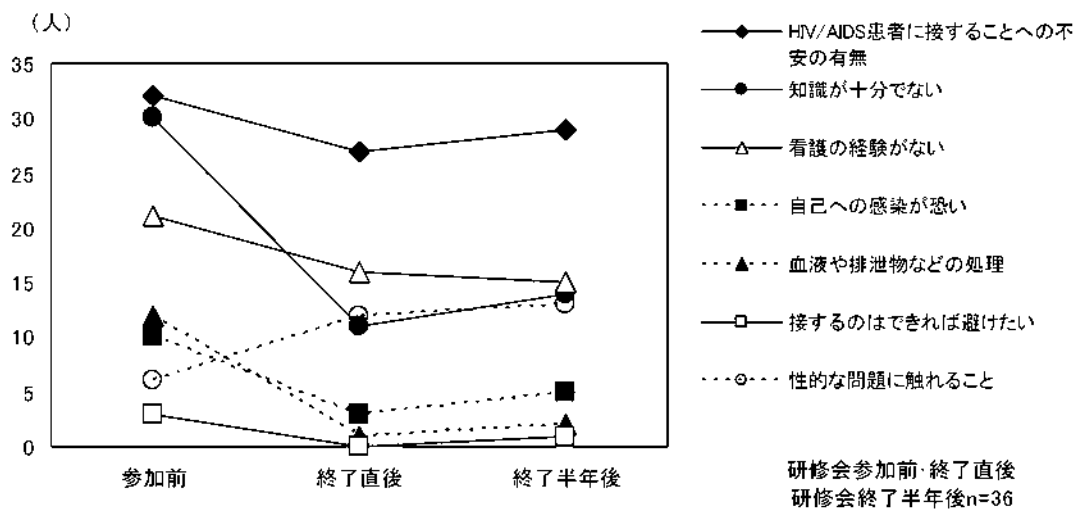


図 1 どのような点に不安を感じるのか (全体)

- 「看護経験がない」では看護経験の有無に関わらず時期の違いはなかった。
- 「自己への感染不安」では未経験者のみ時期の変化に有意差が得られ ( $Q=7.00, p<.05$ ), 研修前より研修後に不安が下がっていた。
- 「血液や排泄物の処理」では経験の有無に関わらず時期による有意な変化があり (経験有  $Q=7.00, p<.005$ , 経験無  $Q=8.67, p<.05$ ), 経験者については、研修前より半年後に不安が減少し、未経験者については研修直後に不安が減少していた。多重比較の結果、両者とも研修前より研修後と半年後の不安が有意に減少していた。
- 「患者に接するのを避けたい」および
- 「性的な問題に触れること」では有意差はなかった。

## 考 察

### 1. 対象者の属性からみえる研修の期待と課題

参加者の 67% が何らかの役職をもっており、平均年齢も高い。病院の中ではスタッフを教育・指導する立場で働くことが多く、職場での影響力は大きい。この対象者に研修を提供していくことの利点は、研修後に病院に帰ったとき伝達していく側の立場になるという点である。実際に終了半年後アンケートでは、研修参加後、各病院で勉強会や報告会などを行っていた者が全体の 58% みられた。研修に参加した看護師が軸となり、各職場の看護師に最新の HIV の知識を還元できるように、適切な情報提供を行うことが重要である。

### 2. 「HIV/AIDS 患者に接することへの不安の変化」と研修の効果

研修を受けることによる効果が明らかとなった項目は「知識が十分でない」、「血液や排泄物処理」の 2 項目であった。知識については看護経験の有無を問わず研修終了半年後も不安が減少しており研修の効果が持続している結果となった。「血液や排泄物の処理」については看護経験によって不安の変化に違いがあり、経験者では半年後に不安が下がり、未経験者は研修終了直後に下がっていた。これは外来見学の場面で実際に外来での医療行為をどのように行っているか、また HIV 診療における感染対策について HIV 専任看護師が具体的に説明し、実際に目で見てもらうことにより不安が解消しているのではないかと思われた。「自己への感染不安」については研修前後では有意に不安が減少しているが、半年後には不安が増加する結果となった。時間経過と共に不安が増加していく傾向にあり継続的な研修の必要性が示唆された。

終了直後アンケートでは研修全体の評価は、全項目で高い評価を得た結果となった。その理由としては、HIV 診療においては患者を取り巻く心理・社会的背景やセクシャリティーへの理解が重要であるが、各専門職による具体的な講義により、患者やその背景・問題点などをより深く理解することができたためと思われる。また、実際に患者の話聞くことにより、自分のイメージしていた患者像や自分の中にあつた偏見の気持ちに気がつき、看護師として今後何ができるか再考する機会になったものと思われた。

### 3. 問題点と今後の課題

研修により、HIV/AIDS 患者に接することへの不安の変化が見られなかった項目では「看護の経験がない」であつ

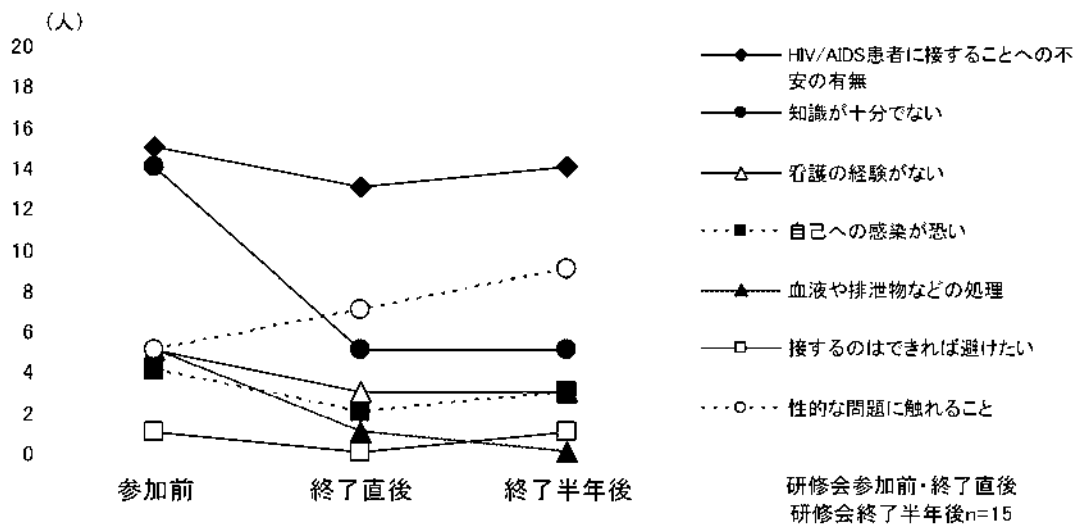


図 2a どのような点に不安を感じるのか (経験者)

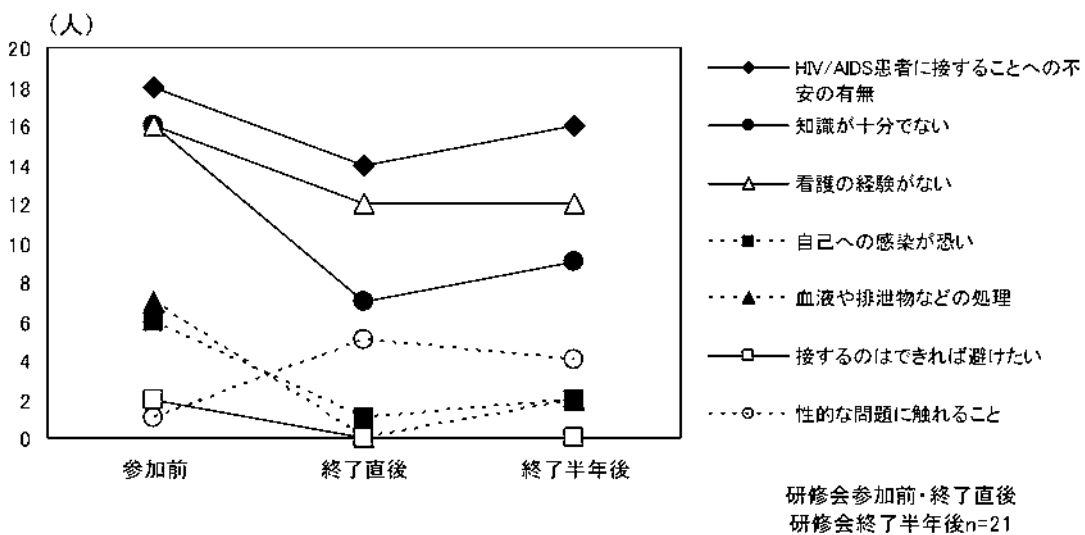


図 2b どのような点に不安を感じるのか (未経験者)

た。今回、看護経験者の中には過去に看護に関わったことはあるが深く介入できていなかったと感じる人や、看護経験の数が少数の人もあり、そのため「看護経験がない」ことへの不安は経験者においても継続的な不安であると考えられた。研修参加者の69%が今後患者に関わる可能性があることと答えていることからこの不安について解消していくために、症例検討などを通じて看護実践力を高めていくプログラムの必要性や必要な時に必要な情報提供ができるように看護のネットワークを作っていくことが重要と考えられた。

「性的な問題に触れること」では研修によって有意な変

化はみられなかったが、グラフ、数値では高い値を示し、自由記述では「性的指向については今までの自分の見解が間違っていた。同性愛についての知識がほとんどなかったことを痛感した」「頭ではわかっているが実際患者さんに接したことがないので性的な問題に触れていくことに不安感がある」などの感想が得られた。以上のことから研修により、自分の価値観の振り返りやセクシャリティーの重要性の認識を深める効果や継続的学習の必要性が明らかとなった。研修終了後に性的な問題に対する不安が増えた原因の一つには、研修により知識を得たことで改めてセクシャリティーについての認識を深めたこと、また HIV 看

護の現場ではセクシャリティーの理解の重要性を認識したことが考えられた。また経験者においては「性的な問題に触れること」に不安を持つ人が研修後も不安をもち続ける結果となったが、アンケートの内容から「自分自身の性に関する価値観が相手に与える影響は大きい」など自分自身の価値観と向き合った結果として生じた不安へと変化したものと思われた。性についての教育は平成2年度の看護教育の新カリキュラムから「精神保健」の中で人間の性を教えることが義務づけられたところである現状<sup>4)</sup>があり、30代後半以降の世代では性について専門教育の中で学んでいない実情がある。先行研究においても日本の看護教育における性の教育の遅れが指摘されている<sup>5-7)</sup>。そのため性の問題に介入していくことに看護師は大きな不安や戸惑いを持っており、今回の結果もそうしたひとつの表れと考えられた。性の問題に介入するにはまず、看護師が自分自身の性的感情、態度、価値観を知っていくことがとても重要なことであり、患者と向き合う第一歩と考えられる。高村は「QOLの実現を目指して生きる一人ひとりを看護の対象として見ていくためには、まず看護者自身が人間の性に対する正しい知識と認識を深めなければならない。その上で患者の性に対する深い理解と受容が生まれ、性=生を尊重した看護が実践できるようになる」と述べている<sup>8)</sup>。セクシャリティーについての教育の継続性がHIV/AIDS看護において重要と考えられた。

## ま と め

今回「自己への感染不安」「看護経験がない」「性的な問題に触れること」においては特に継続的な研修の必要性が示唆された。そこで研修参加者の分析結果を踏まえ、研修修了者を対象に、より実践的な研修「看護師のためのエイズ看護従事者研修アドバンスコース」を企画し実施した。研修会を通して最新のHIV医療情報を提供していくこと、HIV看護の質向上に向け看護ネットワークを構築していくことが、ブロック拠点病院としての当院の役割であると考えられる。看護師の行動を変える契機となるような魅力的な

研修会を、分析結果を考慮しながら企画・運営し続けていくことが必要である。

本研究発表は第18回日本エイズ学会学術集会で発表したものをまとめたものである。

謝辞：本研究にあたりご協力頂いた研修参加者、研修スタッフ、ご指導頂いた先生方に深く御礼申し上げます。

## 文 献

- 1) 石原美和他：エイズクオリティケアガイド. 日本看護協会, p39, 2001.
- 2) 木村昭郎, 高田昇他：中国四国地方におけるHIV感染者の医療体制の整備に関する研究. 厚生労働科学研究費補助金エイズ対策研究事業 平成16年度研究報告書, p113-p125, 2005.
- 3) 渥美宝恵, 伊原由美子, 岡田浩佑他：看護者のAIDS・HIV感染症に関する意識調査報告. 広島大学保健管理センター研究論文, 13: 59-68, 1997.
- 4) 村本淳子：性問題からの回避とその影響. 臨床における性問題とその要因, 看護技術 39 (6): 38-42, 1993.
- 5) 高村寿子, 松本鈴子, 西元勝子, 姫野憲子：全国調査に見る看護婦のセクシャリティー認識. 看護教育, 33 (10): 737-743, 1992.
- 6) 玉井ゆうこ：看護婦のHIV/エイズ患者に対する態度・行動に影響を与える因子. 神奈川県看護教育大学校研究集録, 23: 86-93, 1998.
- 7) 武井朝子：感情と看護. 医学書院, 2001.
- 8) 高村寿子：人間にとっての性 セクシュアリティ. 性セクシュアリティの看護, 建帛社, p1, 2001.
- 9) 松田たみ子, 神山幸枝：患者の性問題と看護アセスメント. 看護技術 39: 55-58, 1993.
- 10) 川野雅資：性の相談と論理. 現代のエスプリ 438, 至文堂, p189-p195, 2004.

## Evaluation of an HIV/AIDS Workshop for Nurses Working in Core Model Hospitals for AIDS Treatment in the Chugoku-Shikoku Region

Yasuko KAWABE<sup>1),2)</sup>, Masae OE<sup>1),2)</sup>, Nobuko KIHANA<sup>1),2)</sup>, Noboru TAKATA<sup>1)</sup>,  
Fumi YAMAGUCHI<sup>3)</sup>, Tomie FUJII<sup>4)</sup>, Akiko OGATA<sup>5)</sup>, Teruhisa FUJII<sup>6)</sup>  
and Akiro KIMURA<sup>7)</sup>

<sup>1)</sup> HIV/AIDS Care Program, Hiroshima University Hospital

<sup>2)</sup> Japanese Foundation for AIDS Prevention

<sup>3)</sup> The Japanese Red Cross Hiroshima College of Nursing

<sup>4)</sup> Graduate School of Health Science, Hiroshima University

<sup>5)</sup> Graduate School of Education, Hiroshima University

<sup>6)</sup> Division of Blood Transfusion Services, Hiroshima University Hospital

<sup>7)</sup> Department of Hematology, Hiroshima University Hospital

**Objective** : To evaluate the workshop program for nurses working in Chugoku-Shikoku regional core hospitals for AIDS, and to clarify regional goals.

**Materials and Methods** : We analyzed the questionnaire intended for 41 nurses who had participated in the workshops held from Jan. 2003 to Jul. 2004. The questionnaire was arranged to be administered at three points in time ; before, immediately after, and at six-months after the workshop.

**Results** : The responses showed that the workshop itself and the program were appreciated by the participants as we found the contents suited their needs. In respect to changes of anxiety, the rate of the anxiety regarding referring to sexual issues increased right after the workshop. We considered this was because participants received more information and so realized the importance of referring to sexual terms in nursing practice for patients with HIV/AIDS (PWHAs). It may be important to further develop the program in respect to the issue of "Sexuality". Other anxieties held by participant nurses decreased right after the workshop ; however, they increased slightly again six-months later, except for the anxiety concerning "inexperience of nursing PWHA".

**Conclusion** : Some hospitals with few experiences of caring for PWHA tend to lack information. We found that our training course could help support nurses working at such hospitals. To keep providing information and sharing experiences with these nurses, it is important to continue this workshop program and to build up the networking system for nurses caring for PWHA in this region.

**Key words** : nursing for PWHA, workshop for nurses, regional core hospitals for AIDS, analysis of the questionnaire, changes in anxiety